

武蔵野 ヒストリー

武蔵野にまつわる歴史を
楽しみながら学ぶ

小金井桜

玉川上水に沿うように、
およそ6キロメートルに
わたって続く小金井桜。

江戸時代から花見の名所として知られ、
広重の浮世絵の題材にもなった桜は、
280年もの間、時代の移り変わりを
ひっそりと見守り続けてきました。



歌川広重「江戸近郊八景之内 小金井橋夕照」
提供：国立国会図書館

玉川上水の両側に連なる桜並木は
小金井桜と呼ばれ、江戸期から明治
期にかけて人々が遠方からわざわざ
花見に訪れるほどの名所として名を
はせていました。

大正13(1924)年に武蔵野市の
境橋から小平市の小川水衛所跡の範
囲は「名勝 小金井(サクラ)」とし
て国の名勝指定を受け、現在は東京
都水道局の「史跡玉川上水整備活用
計画」でも保存が掲げられています。

広大な公園などの桜と比べると一
見地味にも見えるかもしれませんが、
歴史をひもとけば、その偉大さ
がわかるはずです。

八代将軍吉宗の時代、 武蔵野新田開発とともに植樹

小金井桜が植えられたのは、今か
ら約280年前の元文2(1737)
年。八代将軍吉宗の時代、今の多摩
地域で大規模な武蔵野新田の開発が
進められた際、押立村(府中市)の名
主・川崎平右衛門によって植えられ
たことが、江戸時代後期に建てられ
た「小金井桜樹碑」(小平市)に記さ
れています。玉川上水の堤に沿って
桜が植えられたのは、土手の保護や
水の浄化のためと碑には記されてい

ますが、新田のにぎわいのためとす
る文献もあります。

いずれにしても、大和(現在の奈
良県)の吉野山や常陸(現在の茨城
県)の桜川から取り寄せたヤマザク
ラの苗木を玉川上水の堤に植えたの
が、小金井桜の歴史の始まりでした。

広重も繰り返し題材に 江戸の人々を魅了した桜並木

小金井桜の名が広く知られるよう
になるのは、植樹からおおよそ50年が
たった寛政年間(1790年代)に
入ってからのこと。五日市街道を通
じて江戸と人や物の行き来が盛んに
なったことで、人々の口伝えによっ
て小金井の見事な桜の様子が江戸に
まで届きはじめます。

文化元(1804)年には、江戸の
俳人・露庵有佐が内藤新宿から小金
井までの道のりと周辺の名所を紹介
した『玉花勝覧』を発行。今で言う
マップ付き花見ガイドブックのよう
なこの冊子をはじめとして、多くの
文人たちによって小金井桜の名は江
戸中に知られるようになり、花見の
時期には多くの人々が小金井桜を見
るためにわざわざ訪れるようになった
のです。



大正末年の小金井橋の花見風景 提供：小金井市

また、著名な絵師たちにより浮世
絵などの題材にもなりました。なか
でも、浮世絵師・歌川広重は小金井
桜をさまざまな角度から何度も描い
ていることから、お気に入りの題材
だったことがうかがい知れます。す
でにこの頃、上野や飛鳥山なども桜
の名所でしたが、それらとは趣を異
にする玉川上水沿いの小金井桜の素
朴な美しさに広重は引かれたのかも
しれません。



漆山天童旧蔵資料 嘉永4年版の写 彩色「武蔵野小金井桜順道絵図」
提供：早稲田大学図書館



観光写真：「春爛漫」昭和31(1956)年
提供：小金井市

花見客の起点となり にぎわいを見せた境停車場

江戸の人々を魅了した小金井桜は、明治に入ると今度は鉄道の開通によって一層注目が集まるようになります。

明治22(1889)年4月11日に開業した甲武鉄道の当初の営業区間は新宿～立川間の27・2キロメートル。その途中の駅として境停車場(現在の武蔵境駅)も同じ日に開業しました。

旧境村の住人たちが率先して駅を誘致し、土地を提供することで境停車場が実現したのです。おりしも開業は桜の季節。境停車場は小金井桜を見物する人々の玄関口として機能し、開業早々、大変なにぎわいを見せたといえます。境停車場と小金井桜はいわばセットとして広く知られたり、停車場前の茶店などの店舗は桜の時期だけ商売をすれば1年間暮らせるというほど大盛況だったそうです。

小金井保桜会の結成が 国の名勝指定を後押し

明治末期になり、植物学者・理学

博士の三好学によって、小金井桜の品種研究が進んだことから、天然記念物保存事業が活発化します。帝国大学(現在の東京大学)を卒業後、ドイツで植物生理学を学び、「桜博士」の異名をもつ三好博士の研究の結果、小金井桜のヤマザクラ並木は、「天然変種の一大集積地」であることが判明したのです。

こうした流れを受け、小金井桜が咲く地域4村(小金井・武蔵野・小平・保谷)の住民が「小金井保桜会」を結成。東京市の保護事業を支援したことにより、大正13(1924)年12月9日、小金井桜は「小金井(サクラ)」として国の名勝に指定されることになりました。

これをきっかけに、小金井桜は全国的にも知名度を上げることになり、桜の咲く季節には、それまでも増して大変なにぎわいとなったのです。

危機にさらされる小金井桜 復活に立ち上がる

昭和に入っしてしばらくすると小金井桜に危機が訪れます。度重なる戦争が原因です。戦時体制下ともなると、人々は花見をする余裕も自由も

無くなり下火となってしまいました。

それでも戦後まもなく小金井桜まつりが復活しましたが、本当の危機はここからでした。

五日市街道の拡張によって車の交通量が増加し、排気ガスの影響をまともに受けることになりました。また、周辺の樹木の成長によって小金井桜の成長環境は徐々に悪化しました。

しかし、280年もの間、地域の移り変わりを見守りつづけてきた小金井桜をこのまま絶やしてはいけません。小金井市では名勝小金井(サクラ)を復活させるプロジェクトを立ち上げ、市民団体などが保存・復活に向けて活動を始めました。

武蔵野市でも平成28年度に東京都教育委員会・東京都水道局と連携し、名勝小金井(サクラ)の指定区間においてヤマザクラの補植事業を実施しました。今後も、文化財保護や生物多様性の観点をはじめ、行政と地域住民がお互いに理解を深めながら、歴史ある小金井桜を守っていくこととなります。

※指定当初は漢字。昭和25(1950)年制定の文化財保護法でカタカナ表記に。